第53回 守山市美術展覧会

問守山市美術展覧会事務局（社会教育・文化振興課内）　☎・有(582)1142　FAX(581)2733

10月1日～9日に市民ホールで開催された市美術展会。今年は、市内外から246点の力作が出品されました。市展賞を受賞した作品や審査員の講評と総評を紹介します（敬称略）。

講評と総評

日本画

審査員：長谷川 雅也

丁寧な制作姿勢が見てとれる力作です。まとまりのある色数の中で物の質感がしっかりと感じられ、辺りの静けさと共に時の経過を感じさせる匂いまでも漂っていそうです。実感を大切にされ、思いが伝わってきます。

市展賞「暖ノ談」安井 雪乃

審査員総評

全体的に描かれているモチーフへの思いが伝わり、丁寧に描き進めておられるのが伝わってまいりました。風景作が多く豊かな良い風景が辺りに多いことを感じました。色のくすみ、濁りが気になる作が多く見られ、特に影色が黒く強いものが多く見受けられたかと思います。情景の中での色合い・強さを見極め描き進めていただければと思います。

洋画

審査員：日下部 直起

窓辺の柔らかな光を情感豊かに表現されていて秀逸です。日常の何気ない一瞬の中、光という言葉を淡い色調で丁寧なタッチで描かれ、見る者を惹き込んでいきます。少しめくれた本が何かを暗示しているようです。

市展賞「優しい時間」藤田 裕子

審査員総評

丁寧に描かれた作品が多く、自分の個性を強く出したものが賞となりました。絵の具をしっかり付けることとマチエールの工夫が、さらに絵の展開を生むことになると思います。一歩踏み込んだ冒険もしていいと感じました。

彫刻

審査員：酒井 嘉信

少年の顔がいきいきと彫られた木彫レリーフです。特に、目、鼻、口元など細部の造形に作者の対象への深い愛情が感じられます。彩色が彫刻を生かすためには、さらに工夫の余地があると思います。

市展賞「卒園式の朝」土井 三千子

審査員総評

作者それぞれが選んだ素材で、自らの感動を彫刻で表現したいという気持ちが伝わる展示です。彫刻は素材や制作場所などいろいろ制約が多いですが、手仕事によって発見するよろこびには、かけがえのないものがあると思います。

工芸

審査員：三原 サダ子

石粉粘土で制作された魚の作品です。作者独自の魚で、模様や尾ヒレの動きなど作者がとても楽しく制作されている様子が伝わってきます。

市展賞「深海の覇者」矢木 清美

審査員総評

制作上それぞれ工夫されている所がうかがわれて大変見応えのある作品ばかりで、賞の選考に苦慮しました。中でも、多岐にわたる分野において創作性、技術性を鑑みて賞としました。釉とびや絵付けとびなどがあり、とても惜しい作品がありましたが、幅広い工芸の魅力を感じていただけたらうれしいです。

書

審査員：藤居 孝弘

作品サイズは小ぶりながらも、筆力旺盛、エネルギーに満ちあふれた会心の作です。黒と白の厳しいせめぎ合いが作品に緊張感と立体感を与えています。台風の目のような円形の白に、心まで吸い込まれそうです。

市展賞「嵐」赤井 紅楓

審査員総評

長引くコロナ禍や社会を覆う不安感を吹き飛ばすような、生命感にあふれた作品が寄せられ、元気をもらえる展示会になりました。出品者が「このようなものを書きたい」という確かな信念を持ち制作に打ち込まれているところがすばらしいです。若い人たちの勢いのある作品も出品され、明日への希望を感じます。

写真

審査員：小林 賢司

老婆の後姿と猫のバッグの取り合わせが、現代の世相を見事に捉えています。フロアのハイライトの光の中にこれから先の幸せを祈ります。

市展賞「みちづれ」吉村 英光

審査員総評

入賞作品は、被写体と作者の向き合った刻が写されています。肉眼から心眼に変化した作品が多くあったことに、守山市美術展覧会のレベルの高さを感じました。